

2022年4月24日高知教会礼拝

松浦伝道師

説教:「あなたの為に祈った」

聖書: ルカによる福音書 22章 31~34節

### ○はじめに

先週4月17日(日)はイエス様の復活を覚えて、イースター礼拝の恵みにあずかりました。神様の御子であられるイエス様が、十字架に置か狩りになって下さったことによって、私たちの罪の身代わりになって下さいました。イースター礼拝ですから、当然イエス様が復活された聖書の箇所を共に読みました。さて、現在、私が礼拝の説教を担当する時は、ルカによる福音書を順を追って読み進めております。ですので、本日読みます聖書の箇所は、イエス様の復活の前の箇所です。順番が逆転してしまっていますので混乱してしまう方もいらっしゃるかもしれませんが、復活されて今も生きておられるイエス様の十字架前のお姿とそのお言葉に共に耳を傾けていきたいと思っております。

### ○シモン、シモンと名前を二回呼ぶ

イエス様が、十字架にかけられる前の晩、弟子たちといわゆる「最後の晚餐」の時を持たれました。本日の聖書箇所もその席における話を、私たちは読み進めています。最後の晚餐におけるイエス様のお言葉は基本的に、「あなたがたは」と弟子たち全体に語りかけているものです。十二人の弟子たちと食事の席に着いておられるのですから、それは当然のことだと言えます。ところが本日の箇所、31~34節だけは、特別に一人の弟子に対するイエス様の言葉となっています。その弟子とはシモン・ペトロです。彼はこの福音書の第5章で、最初にイエス様の弟子となった人の一人であり、6章でイエス様によって使徒と名付けられた十二人のリストの最初に出てくる人です。つまり彼はイエス様の一番弟子だったのでした。

今「シモン・ペトロ」と申しましたが、シモンが名前でペトロが名字というわけではありません。6章には「イエスがペトロと名付けられたシモン」とあります。つまりシモンが彼のもともとの名前であり、ペトロというのはイエス様によって与えられた名前なのです。そのシモン・ペトロー人に向けて、イエス様は語りかけておられるのです。今日の聖書の箇所の冒頭でイエス様は「シモン、シモン」と二度繰り返しペトロの名を呼んでおられます。10章38節以下のいわゆる「マルタとマリアの話」の中にも、イエス様が「マルタ、マルタ」と呼びかけておられる所があります。ここと本日の箇所とは似ています。いずれの場合も、イエス様が心から相手を愛しつつ、相手の陥っている問題、あるいはその人自身も気付いていない罪や弱さを指摘しようとしているのです。イエス様はそのような時に繰り返し名前を呼んで、語りかけられるのです。

## ○ふるいにかけてられる弟子たち

ここでシモンに対してイエス様がお示しになったのは、「サタンはあなたがたを、小麦のようにふるいにかけてることを神に願って聞き入れられた」ということでした。「サタン」はこの福音書の第4章に出てくる、イエス様を荒れ野で誘惑した「悪魔」と同じ存在であると考えてよいと思います。4章12節に、「悪魔はあらゆる誘惑を終えて、時が来るまでイエスを離れた」と語られていました。その悪魔、サタンが再び登場して来るのが、ルカ22章の3節です。そこには、十二人の弟子の一人であるイスカリオテのユダの中にサタンが入った、とあります。一時イエス様を離れていたサタンが、いよいよ時が来たとはばかりにこの時活動を開始したのです。それによってユダの裏切りが起り、イエス様の逮捕と十字架の死が目前に迫っているのです。

そのサタンが、あなたがたを小麦のようにふるいにかけてようとしている、とイエス様は言っておられます。ふるいというのは、粒の大きさによって必要なものといらないものとを分けるための道具です。小麦をふるいにかけてるのは、脱穀において、収穫すべき麦の粒とその他のもの、もみ殻やゴミとを選別し、分けるということです。ふるいにかけてるとはそのように、ごちゃ混ぜになっているものを選び分け、必要なものとそうでないものとはっきりさせることです。合格か不合格かを決めるということもできます。

サタンがそのようにシモンを、ふるいにかけてようとしているというわけですが、「あなたがたを」とイエス様があえて言っておられるわけですから、シモンだけでなく全ての弟子たちもふるいにかけてられようとしているという事がわかります。つまり、イエス様に従っている本物の弟子か、それとも見せ掛けだけの偽物かを選別されようとしているのです。そのふるい分け、選別は試練によってなされます。主イエスが捕えられ、十字架につけられ、自分の身にも危険が及ぶという試練に直面する時に、弟子たちの信仰は試され、本物か偽物かが明らかになるのです。サタンはそういう試練を弟子たちに与えようとしているのです。

## ○試練と挫折

サタンとはまさにそのように人をふるいにかけて、選別し、本当に神様に従う者なのか、そうでないのかを明らかにしようとする者として聖書に登場します。試練を与えることによって、その人の信仰が偽物であり、本当に神を信じて生きてはいない、ということをも本人にも、また周囲の人々の目にも、明らかにしようとしているのです。

旧約聖書のヨブ記に出て来るサタンもそういうことをしています。神様が、ヨブほど忠実な信仰者はいないだろう、と自慢したのに対してサタンは、ヨブが信仰者らしく見えるのは神様が、目に見える恵みを与えておられるからであって、その恵みを全て奪い去ってしまえば、ヨブだってきっと神様を呪いますよ、と言ったのです。それならやってみなさい、ということになって、ヨブは苦しみのどん底に突き落とされてしまいます。サタンはこのように、試練を与えることによって、信仰深いように見える人間の心の奥底にある罪や弱さ、自己中心的な思いなどを明るみに出して、ほらみろ、人間はこんなに罪深いではないか、神を信じているなどと言っても、そんなの見せかけの偽りに過ぎないのだ、ということを示すこと

によって、私たちを神様の救いの恵みから引き離し、自分のような者は神様を信じて生きること、救いにあずかることもできないのだと思わせようとしているのです。

そのサタンが今、弟子たちをふるいにかけようとしています。捕えられ、十字架につけられるイエス様にちゃんと従えるのか、それともイエス様を裏切って自分の身を守ろうとするのか、そういう厳しいふるいに彼らはかけられようとしているのです。その結果は目に見えています。この試練に打ち勝って、弟子としての歩みを全うできた者は、まさにペトロを筆頭に、一人もいなかったのです。彼らは皆、イエス様に従う信仰において、挫折し、自分が不適切な者であることを思い知らされていったのです。

### ○神に願って聞き入れられた

弟子たちをふるいにかけて、信仰を試し、挫折させようとしているのはサタン、悪魔であるがこのみ言葉は語っているのですが、しかし同時に示されているのは、サタンはそのことを、「神に願って聞き入れられた」のだということです。つまりサタンはこのことを、神様の許可によって行うのです。神様が聞き入れなければサタンといえども、人をふるいにかけることはできないということです。このことは、先ほどのヨブ記においても語られていたことです。サタンがヨブに苦しみを与えることができたのは、神様が、「それならやってみろ」とおっしゃったからです。神様の許可なしには、サタンは人間に試練を与えることはできないのです。

ここに、聖書におけるサタン、悪魔の位置づけが示されています。悪魔やサタンは、主なる神様と対抗して並び立つような、「悪の神様」ではありません。この世に善なる神と悪なる神がおり、両者がせめぎあっているという考え方を、聖書は否定しています。この世界を造り、支配し、導いておられるのはあくまでも主なる神様お一人なのです。その神様のご支配の下で、悪魔とかサタンと呼ばれるものの存在が許されています。それらの力が人間に苦しみや悲しみ、試練を与えることを神様が認めておられるのです。つまり、それらはあくまでも神様のみ手の中でのことです。最終的な支配は神様がしっかりと握っておられる、それが神様と悪魔との関係についての聖書の理解です。

これは、神様が悪魔やサタンの力を用いて人間に苦しみや試練を与え、信仰者をふるいにかけて試そうとしている、と理解すべきではありません。私たちのこの世の歩みには様々な苦しみや悲しみがあり、どうしても説明のつかない、いわゆる不条理があります。私たちはそれらによってふるいにかけてられ、信仰を試されます。それらはサタンによる試みです。しかしこの聖書のみ言葉が示そうとしているのは、そのサタンの試みも、主なる神様のみ手の外で起っているのではないということです、私たちが経験するこの試練の時においても、私たちを最終的に支配し導いて下さる恵みの神がおられるのだ、ということです。そのことを信じることによって私たちは、試練の中で、そこにもなお働いている神様のみ心を求めていくことができます。

試練の中にある私達にとってこのことは、とてもしんどいことです、簡単に答えが得られるようなものでもありません。苦しい問いを抱きながら何年も歩まなければならないこともあります。けれどもそのように苦しみの中にも神様のみ心を求めていくことによってこそ、

苦しみは意味を持つものとなっていくのです。もしも苦しみが神様のみ手の外にあるとしたら、私たちが受ける苦しみに意味はありません。そこでは、何とかして苦しみを逃れるか、あるいはその意味を自分で考え出さなければならなくなるのです。逃れることもできず、意味を考え出すこともできなければ、絶望するしかありません。それゆえに、サタンによる試練も神様のみ手の下にあるという教えは大いなる恵みなのです。「サタンがあなたがたをふるいにかけることを神に願って聞き入れられた」というみ言葉は、「そんなことするなんて神様ひどい」ということにつながるのではなくて、むしろ苦しみ、試練の中にある私たちに希望を与えるみ言葉なのです。

### ○ペトロの覚悟

さて、先ほども申しましたように、サタンにふるいにかけられた結果、ペトロら弟子たちがどうなるかははっきりしています。イエス様に従い通すことはできず、みんな逃げ去ってしまい、彼らは信仰に挫折するのです。弟子として不合格であることが明確になるのです。イエス様はそのことをよくご存知でした。それゆえに32節で、「しかし、わたしはあなたのために、信仰が無くならないように祈った」と言っておられます。これはペトロがイエス様に従う信仰において挫折することを前提としたみ言葉です。「だから、あなたは立ち直ったら、兄弟たちをカづけてやりなさい」というみ言葉もそうです。「立ち直ったら」は一端挫折することを前提としているのです。

しかしペトロは、イエス様のこの前提を受け入れることができません。「いやわたしは、サタンにふるいにかけられても、挫折したりはしません。どこまでもあなたに従っていく覚悟です」と言うのです。それが33節です。「するとシモンは、『主よ、御一緒になら、牢に入っても死んでもよいと覚悟しております』と言った」。「御一緒になら」という日本語の訳は、「あなたさえ一緒にいて下さるなら」ということを、私達に連想させます。ですがこの聖書の個所の原文の意味を捉えて、直訳をすれば「主よ、私はあなたと一緒に牢にまで、また死にまでも行く覚悟です」となります。つまりペトロはここで、「あなたと一緒にいれるなら命もいらぬ」というイエス様への愛を語っているのではなくて、イエス様に従って自分の使命を死に至るまで果す、という決意、使命感を語っているのです。もっと言うならば、信仰者として、イエス様に従って生きるという固い決意をここで表明したのです。

### ○覚悟、信念、決意

この後どうなったかを知っている私たちは、ペトロは随分威勢のよいことを言っている、と思います。そんなに自分に自信があったのだろうか、それともイエス様に自分の信仰が挫折することを前提とする話をされて、弟子の筆頭としての意地で、確信が持てないことを言ってしまったのだろうか、とも思います。けれどもこのことをそのように、ペトロのこの時の気持ちや、彼の性格によることとして考えてしまってはならないと思うのです。これは、信仰とは何か、という根本的なことに関わる問題です。ペトロはここで、自分の「覚悟、信念、決意」を語っています。覚悟、信念、決意を持ってイエス様に従っていくことが信仰だと彼は思っ

ているのです。信仰とは、信仰をもって生きるとはそういうことだと思っている限り、このように言うしかないのではないのでしょうか。

私はこういう決心をしています、こういう覚悟を持っています、ということなしに信仰はありえない、それがペトロの思いなのです。それは、私たちが皆が心の中で思っていることではないのでしょうか。既に信仰者として生きている人も、神様を信じ、信頼し、イエス・キリストに従っていく、そういう決意、覚悟をしっかりと持って歩みたい、そうならなければ、と思っているし、信仰を持てたらと願いつつこの場に集っておられる求道中の方々も、そういう決心や覚悟がどうしたら持てるのだろうか、と考えておられるのではないのでしょうか。だからペトロのこの言葉は、特に珍しいものではありません。おそらく私たちの誰もが、このような言葉にこそ信仰を、信仰者としての生き方があると思っており、このように語り、その通りに実行できる者となることを願っているのです。

それゆえに、34節のイエス様のお言葉は、ペトロ一人に向けられたものではなくて、私たち一人一人に対する予告であり宣言なのです。「ペトロ、言うておくが、あなたは今日、鶏が鳴くまでに、三度わたしを知らないと言うだろう」。ユダヤの暦では日没から一日が始まっていますから、翌朝鶏が鳴くその時も「今日」です。今日この日の内に、三度イエス様を知らないと言う。三度というのは、徹底的に、ということです。「三度目の正直」と言います。一度ならず二度ならず三度まで同じことを繰り返すのは、それが本心だということです。ペトロは、サタンによる試練、ふるいの中で、死に至るまで従っていく、という自分の決心、覚悟を徹底的に否定する言動に陥ってしまう、イエス様はそう予告なさったのです。そしてそれは、信仰とは、覚悟、信念、決意をもって生きることだと思っている私たちの行きつく先の予告です。自分の覚悟、決意によって信仰者として生きようとする私たちは、サタンのふるいの中で、その覚悟を自らが徹底的に裏切ることになるのです。弟子の筆頭であるペトロは、そういう意味で私たちの先頭に立っているのです。

### ○あなたの為に祈った

ペトロがその威勢のいい言葉を裏切り信仰において徹底的に挫折してしまうことを予告しているイエス様のお言葉はしかし、彼を断罪しようとしているわけではありません。最初の方で申しましたように、イエス様はペトロを深く愛しておられるのです。そして彼が真実の信仰に生きる者となるように導こうとしておられるのです。32節の、「わたしはあなたのために、信仰が無くならないように祈った」というみ言葉がそれを示しています。ペトロの信仰が無くならないように、彼がこの挫折においてもなお、信仰者として歩み続けることができるように、イエス様は祈っておられるのです。しかし、彼の信仰が無くならないとはどういうことなのでしょう。イエス様を三度知らないと言い、イエス様との関係を徹底的に否定したペトロに、いったいどんな信仰が残っているのでしょうか。これは、ペトロの信仰が大部分は、99パーセントまでは失われてしまいが、なお1パーセントが残っている、その残り火のような信仰をもう一度燃え立たせる、ということではありません。

そうではなくて、彼を全く新しい信仰に生きる者とする、ということなのです。彼が自分で信仰とはこのようなものだとして理解していた信仰、つまり自分の覚悟、決意をしっかりとって生きる、という信仰は、三度、つまり徹底的にイエス様を否定したことによって、徹底的に、完全に、100パーセント挫折し、失われたのです。その彼がなお信仰者として生きることができるとしたらそれは、イエス様が彼のために祈って下さる、その祈りによって神様から与えられる信仰に生きることでしかありません。それはもはや、自分の覚悟や決意によって生きることではありません。神様が、独り子イエス・キリストによって成し遂げ、与えて下さる救い、罪の赦しの恵みをいただいて、それによって生かされるという信仰です。それが、イエス様がペトロに与えようとしておられる全く新しい信仰、いや、実はそれこそが、神様がもともと私たちに与え、それによって私たちを生かそうとしておられる真実な信仰なのです。私たちがその信仰を自分の勝手な思いで変質させて、自分の信念、決意、覚悟を信仰と混同してしまっているのです。そして実はそれこそ、サタンの思う壺なのです。私たちが、自分の信念や決意や覚悟を信仰だと思い、それに従って生きることを追い求めているなら、その私たちを試練のふるいによってつまづかせ、挫折させ、弱さや罪を暴露するのは簡単なことなのです。そしてその挫折によって、信仰者として生きることには絶望ささえることも簡単なのです。

#### ○十字架によるとりなし

イエス様は、このサタンのたくらみと戦って下さっています。サタンは、私たちをふるいにかけることを神に願って聞き入れられました。イエス様はそのサタンに対抗しつつ、同じ神様に、しかもご自分の父である方に、私たちの信仰が無くならないように祈って下さっているのです。イエス様の祈りは、ただ言葉で何かを祈り願うというだけではありませんでした。イエス様は、罪に捕えられてしまっている私たちのために、私たちの罪を全て背負って、十字架にかかって死んで下さったのです。そのことによって私たちの罪の赦しを実現して下さいました。イエス様はまさにご時分の命を与えて、私たちのためにとりなし、祈って下さっているのです。

父なる神様は、独り子主イエス・キリストの十字架の死による祈りに応えて下さり、イエス様を復活させ、私たちが新しい命に生きる道を開いて下さいました。そして、サタンによる試練に遭う私たちが、その試練によって押しつぶされてしまうのではなく、主イエス・キリストによって与えられた罪の赦しの恵みを信じて新しく生きることができるよう支えて下さるのです。サタンによる試練も神様のみ手の中にある、ということがそこで大きな意味を持っています。イエス様の父である神様のみ手の中で、試練は、イエス様の十字架の苦しみと死にあずかり、イエス様がご自身を犠牲にして下さることによって罪の赦しが与えられたことを覚える場となるのです。そしてその試練の中で、イエス様の復活にあずかって新しい命に生かされていく希望が与えられていくのです。

#### ○兄弟たちを力づけてやりなさい

イエス様はペトロに、「だから、あなたは立ち直ったら、兄弟たちを力づけてやりなさい」とおっしゃいました。これは、後にペトロが使徒たちの中心として教会を指導する者となることを見越してのみ言葉です。ペトロが教会の兄弟たちを力づける、そこで語られることはもはや、自分の信念、決意、覚悟に生きる信仰の勧めではありません。「私はそういう自分の覚悟が信仰だと思っていた。しかしサタンによる試練の中で、その信仰において私は徹底的に挫折した。しかし主イエス・キリストが、イエス様を徹底的に否定したどうしようもない罪人である私のために祈って下さっていた。十字架の死はそのイエス様の祈りの現れであり、私の罪をイエス様が全て引き受けて死んで下さることによって、私を赦して下さった。そして今、私は父なる神が復活させて下さったイエス様の新しい命にあずかって、罪赦された者として新しく生きている。自分の信念や覚悟に生きるのではなく、イエス様が実現して下さったこの救いにあずかって、神様の恵みによって生かされることこそがまことの信仰です。イエス様はあなたをも、この信仰に生きるようにと招いておられる。自分の覚悟と努力によって立派な人間になることによってではなく、イエス様による救いの恵みを信じて、感謝してそれをいただくことによって、あなたもその信仰に生きることができる」。ペトロはどのように語り、教会の人々を力づけていったのです。教会はそういう信仰に生きる群れです。私たち一人一人もまた、このまことの信仰へと今招かれているのです。

#### ○祈り

神様、本日の聖書の御言葉によってあなたの御心が私たちに示されました。感謝いたします。イエス様の一番弟子であったペトロは、信念や覚悟をもってイエス様に従っていくことが、信仰であると思っていました。私たちもまた、ペトロと同じように、ぶれることのない信念をもって生きて行くことこそが信仰的な歩みだと勘違いしていました。ペトロをはじめイエス様の弟子たちは皆、十字架を恐れて、イエス様の前から逃げ出してしまいました。

イエス様は、そんな私たちの為に、信仰がなくならないように祈ってくださいます。祈って下さるだけではなく、自らの命を捧げて、十字架の道をただひたすらに歩み私たちに新しい命の道を与えてくださいました。私たちの覚悟や信念によってではなく、イエス様の100%の恵みによって私たちに、救いが与えられていること。信仰者として歩むことが許されていることを心から感謝いたします。